
侍道 4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

KINOKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍道4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

【Nコード】

N8497Y

【作者名】

KINOKO

【あらすじ】

侍道4の鬼怒川千佳きぬがわちかが好きで書いてみました。これはもしも千佳が主人公だったらというお話です。ルートとしては主に『外国人ルート』と『希望の光ルート』に沿って書いていきたいと思います。

拷問好きの「冷酷姫君3姉妹」と人々から呼ばれ、恐れられている3姉妹の次女『鬼怒川千佳』は毎日行っている拷問に飽きて珍しく外出してみる。この行動が1つの結末を迎える事となっていく…。

千佳 外の世界へ（前書き）

主人公は鬼怒川千佳。様々な勢力と関わり、千佳は何を思うか…。

千佳 外の世界へ

幕末の時代。阿見浜の代官所に拷問好きの3姉妹がおりましたとさ。

「お仕置きの時間だよ！」

髪を束ねた美しき姫『鬼怒川千佳』が牢の扉を開け、罪人に歩み寄り、罪人を連れ、両腕を後ろ手に縛りつけ、足場のような床に正座させ、人間豚達が罪人に向かって重石を投げつける。

「やめて〜！？」

罪人が喚き叫ぶのを見て、千佳は高笑いするだけであった。

代官所内。千佳は拷問を終え、愛用の戦闘服から黒い小綺麗な着物に着替え、自室に戻った。

「お姉様。お疲れ様ですの。」

千佳を労ったのは短い髪で同じ着物を着ている千佳の妹の『鬼怒川百合』である。

千佳「チッ」。最近の治安が悪いせいでヤクザ者や金を踏み倒す輩とか出てきて面倒だよ！」

千佳も百合もそして、

「その割には楽しんでません？千佳。」

千佳と百合の姉『鬼怒川万由』も拷問が趣味であるが、最近は何見
浜の治安が悪いので千佳がほとんど拷問している。

千佳「毎日毎日…。同じ事ばかりで退屈だよ…。」

千佳は文句を言いながら、立ち上がり、自室を出る。

百合「あつ！お姉様。どこにいくんですの？」

千佳「ちよつと出掛けてくる。」

万由「あら珍しい。千佳。暗くならないうちに…。」

千佳「わかってるよ！あたいは百合より大人だ。」

千佳は代官所を出る。

百合「お姉様！私だって大人ですよ！」

代官所から離れ、千佳は刀を一本だけ持ち、大通りを歩いていた。
二刀流の使い手である千佳だが、ここでは『鬼怒川千佳』を隠し、
女でありたいのである。一本だけの刀は護身用であり、一刀流でも
戦えないわけではない。

千佳「領事館？」

千佳の眼に少し離れているが目立った建物『領事館』が映った。

千佳「公使様にお茶でも入れてもらうか…。」

あの阿見浜の戦。3姉妹と『茂呂茂』とで外国人公使『ローラ・リター』とその護衛の伯爵『J・J』とで日本の事で話し合いをしていた。千佳にとつてはくだらない話だったが、紅茶とやらが美味しかったのを覚えていた。男勝りな性格の千佳もまた女なのであった。

千佳「もう一度飲んでおきたいね〜」

千佳は思い出し笑いをしながら、領事館へと向かった。

領事館へ挨拶&電信あり（前書き）

セリフとかはゲームの時と異なると思いますが、ゲームらしく選択肢も書いてみましたが、戦闘の書き方がシヨボーイと思いますが、読んでいただければ幸いです。

領事館へ挨拶&電信あり

1日目。昼。千佳は領事館を目指し、居留地という外国人とホームレスの多い通りを歩いていた。カランカラン。

千佳「？」

千佳の足元に空き瓶が転がった。

千佳「何だい？これは。」

「すみません…。姫様…。」

千佳に謝ってきたのはホームレスだった。

千佳「姫様はおよし！気をつけな。」

千佳は空き瓶を手渡し、領事館へと歩き直した。

ホームレス「助かった…。」

ホームレスが千佳を恐れていたのは千佳による拷問が待っていたかもしれないからだ。しかし、千佳は見逃したため、ホームレスは安心感と疑問をもっていた。

メリンダ「姫君様か？公使様に何用か？」

領事館を見張っていたのはローラに仕えるパツキン隊を束ねている金色の鎧の女性『メリンダ・デカメロン』であった。

千佳「堅いねえ…。ちょっと公使様とお茶したくなったのさ。」

メリンダ「では、ついてくるがいい。」

メリンダは千佳を領事館に案内し、中へと入った。

領事館内。ローラの部屋に案内される千佳。

千佳「へえ。あたいらのことは偉い違いだね。」

千佳は洋風の部屋を初めて見る。

ローラ「ようこそお越しくださいました。」

千佳を出迎えてくれたのはローラ。

「Ｊ・Ｊ」「いやあ。相変わらず美しい姫君様だ♪」

「Ｊ・Ｊ」も千佳を出迎えてくれたが、

千佳「チツ…。ケダモノが…。」

ローラ「すいません…。伯爵に悪気はないんです…。」

千佳「まあいいよ…。お茶煎れてくれない？紅茶とやら、美味しかったからね。」

ローラ「お茶をお持ちしてください。」

ローラはメリンダにお茶を命じ、千佳は近くの椅子に座る。

ローラ「遠い所からわざわざ…。」

千佳「挨拶はいいんだよ。」

ローラ「あのお話…。考えて頂けましたでしょうか？」

あのお話とは、日本に米国の技術や知識を取り入れ、世界有数の絹の工場を建てるという話だ。

千佳「あたい1人じゃ決められないよ。お父様に聞いてみないとねえ。それに今すぐじゃ攘夷志士の連中が騒ぎ立てるよ。アハハハハ。」

千佳の高笑いにローラは苦笑い。千佳とローラのところに紅茶が運ばれ、千佳は紅茶を口にした。

千佳「美味しい♪少なくとも紅茶だけは日本に置いてもらいたいもんだねえ♪」

千佳は紅茶の味に女性らしさを魅せていた。

ローラ「姫君様。この後お時間よろしいでしょうか？」

千佳「いいよ！いいよ！あたいは退屈してたところだったからね。」

ローラ「夕方に最新技術を使って開発した機械の実験をしたいと思うのですが、見ていきませんか？」

千佳「実験？」

ローラ「はい！」

千佳（面白そうだねえ。orつまらない帰る！）

千佳「面白そうだねえ。どんな物が見させてもらっよ。」

ローラ「ありがとうございます。」

夕方。千佳とローラは領事館を出て、近くの機械に近づいた。

千佳「何だい？これは。」

ローラ「これは遠くにいる人に言葉を送る道具ですよ。」

千佳「へえ。」

千佳が感心していた時、

茂呂「いよいよ始まるんですね。」

千佳「茂呂！？」

茂呂「これはこれは姫君様。珍しいですね。外出とは。」

千佳「なんだっていいだろ？そうだったね…茂呂は積極的だったな。」

さすがのお嬢様の千佳も茂呂の行動は見ていた。

ローラ「それでは実験を開始しますので。」

茂呂「はい。姫君様。こちらへ。」

港。千佳は茂呂に連れられ、もう一台の機械に近づいた。

千佳「どうなるんだい？」

茂呂「これで言葉が紙になって出てくる仕組みですよ。」

千佳「なるほどね。」

そして、機械から紙が出てきた。

千佳「英語？ここは日本だよ…。日本語にшина。」

茂呂「まあ…そうおっしゃらずに…。この茂呂茂に読めないものはない。」

千佳「さっさと教えな。」

紙には『help me』…。

茂呂「助けて。」

千佳「助けて？何言ってるんだい？」

茂呂「ローラさんが危ない!？」

茂呂は走る。

千佳「ちよつと!？待ちな!」

千佳も走った。

領事館前。赤い服の男達がローラを囲む。

ローラ「助けて!？」

茂呂「ローラさん!？」

千佳と茂呂が駆けつける。

千佳「攘夷じゃないか。」

攘夷「なんだ貴様ら？」

千佳「いい退屈凌ぎになりそうだよ」

千佳は刀を抜き、茂呂も素手の構えをした。

茂呂「これでも鍛えてるんだぜ。」

茂呂は夕張流体術で攘夷をなぎ倒し、

千佳「終わりだよ！」

千佳も刀を器用に振り、攘夷をなぎ倒し、攘夷は全滅した。

千佳「大したことない奴らだね。」

千佳は刀を収める。

茂呂「何がともあれ、実験は成功ですな。おかげでローラさんの命が助かったんだから。」

ローラ「はい。それと…姫君様のおかげです。」

ローラにお礼を言われ、千佳は顔を赤くし、

千佳「英語じゃなくて日本語に…。茂呂が読んでくれたから助かったんだからな…。」

千佳はツンデレになり、恥ずかしながら、その場を去ってしまったのだった。

辻斬りを辻斬る（前書き）

千佳がつま斬りを発動します。

辻斬りを辻斬る

夜。本来なら千佳は代官所に帰らなければならない時間だが…。

千佳「もの足りないね…。」

千佳はまだ帰らずに領事館に入った。

Ｊ・Ｊ「やあ。君かい？」

出迎えたのはＪ・Ｊだった。

Ｊ・Ｊ「君は僕と同じ人間だと感じた。」

千佳「はあ？」

Ｊ・Ｊ「この国のサムライは辻斬りとやらをして人斬りの経験を積んでいくらしいね。」

千佳「あたいは辻斬りなんてやったことないけどね。」

Ｊ・Ｊ「そこで君の腕を見込んで頼みたいのだが、辻斬りを逆に斬ってほしいんだ。」

千佳「辻斬りか…。」

千佳は考える。

千佳（面白そうだねえ or 図々しいね！）

千佳「面白そうだねえ。このまま帰るのも惜しかったところだよ。」

Ｊ・Ｊ「そうかい。そうこなくっちゃね！」

千佳とＪ・Ｊは外道へと向かった。

外道。

Ｊ・Ｊ「この辺りならいいはず。」

千佳とＪ・Ｊを１０人ほどの辻斬り達が囲む。

辻斬り「試し斬りさせる！」

Ｊ・Ｊ「それでは、ボクを樂しませてくれたまえ♪」

Ｊ・Ｊは岩影に隠れた。

千佳「本当に気に入らないケダモノだね…。」

辻斬り「試し斬りさせる！」

千佳「うるさいね…。安心しな！あたいがすぐにあの世に送ってやるからさ。」

千佳は刀を抜き、構える。

辻斬り「夜は長いぞお！」

辻斬り達は千佳に襲い掛かり、

千佳「あたいは早く帰らなくちゃいけないんだよ！」

千佳は構え直し、刀を振るスピードが速くなる。千佳はつま斬り（つまらぬ者を斬ってしまった）を発動させ、

千佳「終わりだよ！」

千佳は刀を収め、辻斬り達は一瞬で血しぶきをあげて倒れていった。

J・J「素晴らしい！こんなにエキサイトしたのは初めてだ！さすがでした。姫君様。」

J・Jは満足げに帰っていった。

千佳「もっと強い奴はいないかい？」

千佳は不満をもらしながら代官所へと帰って行った。

絵師との出会い（前書き）

オリジナルストーリー。千佳の恋物語みたいなのを書いてみました。

絵師との出会い

2日目。昼。今日は英国の病院が開業された。しかし、英国人は幕府に支援金を要求し、3姉妹はイライラしていたが…。

千佳「出掛けてくる。」

万由「またですか？」

百合「お姉様。どうしたんですの？」

千佳「ちょっと気晴らしに行ってくるだけだよ！」

千佳は代官所を出て行った。

万由「最近千佳おかしいですわね…。いつもなら拷問で気晴らしするはずなのに…。」

大通り。何のアテもなしに千佳は歩いている。

千佳「イライラするな！」

千佳が適当に歩いていると…。

「だぁ！？コラァ！」

千佳はヤクザ者にぶつかってしまったが、千佳が無視して歩こうとしたら…。

ヤクザ「おい！姉ちゃんよ。どこ見て歩いてんだあ？」

ヤクザ者は千佳にガンつける。

千佳「何だい…。うるさい野郎だね。」

ヤクザ「何だと！？おっ！姉ちゃん美人だな。俺様の女になれ！いい思いをさせてやる！」

ヤクザ者はアヘアへとしている。

千佳「気持ち悪い奴だね…。治安が悪いせいか…。」

千佳は刀を抜こうとする。ここで拷問してやろうと考えていたからだ。ちなみにここでの千佳は鬼怒川を隠している。

「やめる！」

1人の男が仲裁に入った。

ヤクザ「あんだあ？てめえ！」

男「あわわわ…。」

千佳（情けない男だね…。）

男「その女性が嫌がっているではないか…。」

男はビビり気味でヤクザ者に言う。千佳を助けようとしているよう

だ…。

千佳「あんだ。」

ヤクザ「てめえ！」

ヤクザ者は刀を抜き、男は腰抜けとなる。

男「やつ…やめろ！」

ヤクザ「口だけは達者だな！女の前だからって格好つけやがって！」

千佳（あたいはただの女じゃないよ！orごめんなさい。許して〜。）

千佳「あたいはただの女じゃないよ！男はみんな情けないねえ…。」

千佳は刀を抜いた。

ヤクザ「俺様が勝つたら俺様の女になれ！」

千佳「あたいは今機嫌が悪いんだ。あの世に行っても知らないよ！」

ヤクザ者は刀を構え、千佳に切りかかるが…。

千佳「遅い！」

千佳はヤクザ者を斬り、倒れた。

ヤクザ「こ…いつ…強い…。」

千佳は刀を収め、

千佳「大丈夫かい？」

千佳は男に声をかける。

男「すみません…。あの…食事はいかがですか？奢りますので…。」

千佳「あたいが怖くないのかい？」

千佳の問いに男は真っ直ぐ千佳の眼を見て、

男「情けないですよ…。あなたを助けるつもりが…逆に女性に助けられてしまうなんて…。ですから…お詫びに…。」

千佳は男の弱々しいところに笑ってしまい、

千佳「しっかりと奢ってもらうからね。」

男「はい！失礼ですが…名は？」

千佳（あたいは千佳or無礼者！）

千佳「あたいは千佳。」

しつこいようだがここでの千佳は鬼怒川の娘を隠し、1人の女として名字は名乗らないのである。

男「俺…武蔵といいます。」

千佳「武蔵かい。覚えておいてやるよ。さっ。行くよ。」

港の寿司屋。千佳は初めて寿司屋を訪れた。

「へい！らっしやい！」

大将の声に千佳は少し圧倒されたが、

武蔵「座ってください。」

武蔵は椅子に座り、千佳も隣に座る。

「お客さん。何を握りましょう！」

千佳「握る？」

武蔵「あれ？千佳さん…。お寿司を知らないですか？」

千佳（悪かったな！orぶざけるな！）

千佳「悪かったな！あたいは寿司を外で食べた事ないんだよ。」

武蔵「すみません…。」

千佳「謝るなよ…。武蔵に任せるとするよ。」

武蔵「マグロを。」

「あいよ！」

大將はマグロを握り、

「へい！お待ち！」

千佳と武蔵にマグロが出され、口に入れる。

千佳（たまにはいいかもな…。）

寿司を平らげ、千佳と武蔵は話をした。

武蔵「千佳さんは何をしているんですか？」

千佳（剣士だor姫君だ）

千佳「剣士だよ。」

武蔵「千佳さん。女性剣士で、さっきだってとても強かったですよ。」

千佳「あたいをなめんじゃないよ。あんたは剣士なのかい？」

武蔵「俺は護身用に刀を持ち歩いているだけで…実は絵師なんだ。」

千佳「絵師？」

武蔵「日本を旅して絵を描いているんです。今は阿見浜の絵を描いていて、明日には阿見浜を出ようと思ってまして…。」

千佳「明日…。」

何故だか…千佳は武蔵が少し気になったが、進展もなく、2人は寿司屋を出た。

港。

武蔵「今日はありがとうございました。楽しかったです。」

千佳（あたかもさorつまらないよ！）

千佳「あたかもさ。寿司。意外と美味しいじゃないか。」

武蔵「では失礼します。千佳さん。」

武蔵は去っていき、千佳は複雑な想いをしながら武蔵の背中を見送っていたのだった…。

千佳「武蔵か…。」

お団子物語（前書き）

千佳が段々変わっていきます。千佳の設定を若干変えてみました。

お団子物語

夕方。千佳は昼に出会った武蔵が頭から離れないまま領事館へと歩いていた。

千佳（あたいが…なんであんな軟弱男なんか…。）

ローラ「姫君様？」

千佳「公使様！？驚かすんじゃないよ！？」

ローラの声で千佳は我に還った。

ローラ「すみません…。あの…お時間よろしいでしょうか？」

千佳（何だい？or他を当たりな！）

千佳「何だい？」

ローラ「日本にはお団子という甘いお菓子が茶屋にあると聞いたんですが…よろしければ、連れてっていただけないでしょうか？」

千佳「ああ。あたかも丁度小腹が空いていたところさ。」

ローラ「ありがとうございます。」

千佳とローラは外道にある茶屋へと向かった。

茶屋。千佳とローラはお団子を食べていた。

ローラ「歯ごたえがあつて、とっても甘い。」

千佳「それは良かったな。」

そこに…。

「見ろよ。異人と女が団子食つてゐるぜ！」

現れたのは4人のならず者だった…。

ならず者「お嬢ちゃん。俺にもあゝん。」

ならず者「そっちの姉ちゃんも俺達に食わしてくれよ。」

ならず者「アハハハハ。」

千佳「チツ！汚い男共だね！」

千佳は立ち上がる。

ならず者「何だと!？」

千佳「死ぬ覚悟はできてるかい？」

千佳は刀を抜く。

ならず者「ええい！この女をいたぶってやれ！お楽しみは後だ！」

ならず者達は刀を抜く。

千佳「いたぶるのはあたいの専門特許だ！」

千佳は襲い掛かるならず者達を峰打ちで跪かせた。

「何の騒ぎだ？」

ならず者の大将らしき男が現れた。

ならず者「兄貴…。この女が…。」

千佳「何だい？喧嘩売ってきたのはそいつらだよ。」

ならず者の大将は千佳を見た瞬間！？

大将「おい！？退け！」

ならず者「なんでです？」

大将「この方は幕府の冷酷姫君3姉妹の1人だぞ！？」

ならず者「……えええええ！？」

ならず者達は千佳の正体を知り、土下座をした。

大将「失礼しました！？」

千佳（さっさと消えな！orお仕置きだよ！）

千佳「さつさと消えな！あんた達みたいなの拷問する価値もない！」

大将「失礼しました!？」

ならず者達は逃げ出した。

ローラ「ありがとうございました。姫君様はお強いんですね。」

千佳「大したことないさ。ほら！さつさと帰るよ！」

千佳とローラは茶屋から離れ、山を降りていく。

ローラ「あの…姫君様…。」

千佳「何だい？」

ローラ「手を繋いでもよろしいですか？」

ローラの問いに千佳は。

千佳「好きにしま…。」

ローラは千佳の手を握り、2人は領事館へと戻った。

領事館。

ローラ「お団子。とても美味しかったです。また茶屋に連れてってもらえますか？」

千佳「気が向いたらね。」

千佳は領事館を出て、ローラは千佳を見送った。

居留地。夕日に照らされながら千佳は考え事をしながら歩いていた。

千佳（あたい…手を握ってもらったのはお母様以来だね…。）

千佳は自分の手を見つめながら、ローラに手を握ってもらった事を思い出していた。

千佳（あたいの手…冷たいな…。公使様の手は温かった…。）

千佳は自分の手は冷たいと感じていた…。今まで拷問ばかりしてきた冷たい自分…。握ったことがあるのは刀くらい…。幼い時に亡くした母の手以来、人の手を握ったことがなく、人が温かった事も忘れていた…。千佳の目には涙が浮かんでいた…。

千佳（お母様…。ごめんな…。お母様が握ってくれた手…。あたい自身が冷たくしちまって…。）

千佳の涙が止まらなくなり、千佳は声を挙げそうになった時…。

「千佳さん？」

1人の男が千佳に声を掛けてきたのだった…。

姫君に弟子入り志願（前書き）

オリジナルストーリー。千佳が良い人になります。まずは前編。

姫君に弟子入り志願

夜の大通り。泣きそうになってしまった千佳の前に昼に出会った絵師『武蔵』が現れた。千佳は涙を流しながら、鬼怒川の娘であることと拷問趣味であることは隠したが、自身の手が冷たいということ、母を早くに亡くしたということ、人の手をずっと握ったことがないことを話していた。

千佳「なっ！？何をするんだい！？」

武蔵はいきなり千佳の手を握った。

武蔵「千佳さんの手、温かいですよ。冷たくなっておりません。」

千佳は顔を赤くし、武蔵の手を振り払い、

千佳「あんたに何がわかるんだい！？」

武蔵「わかる気がします…。俺も妹がいましたから…。」

千佳「妹？」

千佳の問いに武蔵は深刻な顔をした。

武蔵「千佳さん…。隠してごめんなさい…。俺が絵師なのは表向きで…本当はヤクザに売られた妹を探して旅をしていたんです…。そして、情報を元に阿見浜にたどり着きました。」

千佳「やっぱりあんたは剣士なのかい？」

武蔵「いえ…実は…人を1人も斬ったことがないんです…。」

武蔵は人を斬ったことがない…。つまり、刀を使ったことがないと同じことである…。

千佳「あんたよく生きてられたな…。」

武蔵「あの…千佳さん…。俺を弟子にして頂けませんか!!」

千佳「はあ?」

武蔵は千佳に頭を下げた。つくづく情けない男だと思った千佳だが…。

千佳（仕方ないね… or 他を当たりな!）

千佳「仕方ないね…。あんたの度胸に負けたよ。」

武蔵「はっ…はい!お願いします!師匠!」

千佳「師匠はおやめ。今まで通りでいい。」

武蔵「まずは何をすれば?」

千佳「そうだね…。」

千佳が考えていると…。傘と面を被った怪しげな人が歩いていた。

千佳「よし!武蔵。」

武蔵「はい！」

千佳「あいつは辻斬りだ。まずはあいつを斬ってきな。刀を使うにはまずは経験が必要だからね。」

武蔵「任せてください！千佳さんは見ててくださいね！」

千佳「言ったな？ではやってみな。」

武蔵は辻斬りの元に向かい、千佳は少し期待の笑みを浮かべたが…。

武蔵「あの…辻斬りさんですか？」

武蔵が声をかけると、辻斬りは刀を抜いた。

武蔵「うわああああ！？」

武蔵は腰を抜かしてしまい…。

千佳「何してんだい！？」

武蔵「あわわわ…。」

武蔵は完全に腰を抜かしていた。

千佳（仕方ないね… or 放っておく…）。

千佳「仕方ないね…。あたいの責任もあるからね…。」

千佳は武蔵と辻斬りの元に向かった。

辻斬り「死ね！」

辻斬りは武蔵に切りかかった。

武蔵「千佳さん！？」

千佳「まったく…見てらんないよ！」

千佳は刀で辻斬りの刀を防ぎ、

辻斬り「ぐっ！？」

千佳は辻斬りを蹴り飛ばし、

千佳「武蔵！あんたが腰に掲げてるその刀、何の役に立ってないじゃないか！？」

武蔵「やっぱり…怖いです…。」

武蔵は恐怖のあまりに目をつぶっていたので…。

千佳「せめて目だけは開けときな！あたいの動きをよく見てな！」

千佳の言葉に武蔵は少し目を見開き、

千佳「かかっておいで！」

千佳は辻斬りを挑発し、辻斬りは千佳に切りかかったが、

千佳「遅い！」

千佳はがら空きになった辻斬りの鳩尾を斬りつけた。

千佳「弱くて話にならないよ！」

千佳は刀を収める。

武蔵「やっぱり強いです…。千佳さんは…。俺なんか…」

千佳「あんたね…。そんなんで妹を助けられると思ってるのかい？」

武蔵「俺は弱いんです…。ヤクザが家に来て…。両親は妹を売った…。俺はその時…怖くて…便所に籠もっていて…。妹は叫んでいたんです…。『お兄ちゃん助けて！』って…。でも俺は…。妹は今頃…。」

武蔵は涙を流し、千佳は…。

千佳「今頃なんだい？今頃でもあんたに助けてって叫んでるんじゃないかい？」

武蔵「そんなのわからないじゃないですか！？」

千佳「そんなの本人に聞いてみなきゃわからないだろ？それに、最初は誰しも強くなかないよ！あの時は怖くてもあたいを助けようとしたんだろ？だからあんたは便所に籠もっていた時よりも強くなってるんだよ。」

武蔵「千佳さん…。」

千佳「っで？どうするんだい？」

千佳の説教に武蔵は…。

武蔵「お願いします！俺！強くなりたいです！妹が無事なのかだけでも知りたいんです！」

千佳「男に未言はないよ？」

武蔵「俺…もう逃げたりしません！千佳さんの前で格好悪いところは見せられません！」

千佳「よく言った！だったら…。」

千佳は辺りを見回し、

男「いいじゃねえかよ！姉ちゃん。」

女性をしつこくナンパしている男を発見。

千佳「よし！刀を使わないでいいからあのだらしのない男を倒してみな。」

武蔵「はい！今度こそは！」

武蔵はナンパ男の元へと向かった。

落ちぶれた侍と親方（前書き）

鍛冶屋からグレたあの男が出ます。武蔵が強くなります。千佳のSが発揮するかも…。話としてはオリジナルです。

関係ない事ですが、千佳の戦闘服欲しくて侍道4の難しいレベルでやってもすぐにやられてしまうKINOKOです…。（笑）

落ちぶれた侍と親方

夜。武蔵はナンパ男に近づいた。

「やめなさい！」

「あん？」

「女性が迷惑してるじゃないですか！」

「格好つけてんじゃねえぞ！」

ナンパ男は刀を抜き、武蔵は…。

「不本意だが…仕方ない。」

武蔵は刀を抜いた！

「よし！」

千佳はまるで成長した我が子を見守るかのように小さく喜んでいる。

「うりゃあ！」

ナンパ男は刀を振り、

「やめてください！？」

武蔵は頭を下げ、刀を喰らわなかった。

「本当にすいません…。」

武蔵は頭を上げると…。

「痛てっ！？」

武蔵の頭がナンパ男の顔にヒット。

「てめっ…。！？」

ナンパ男が油断している間に…。

「すいません！？」

武蔵は刀を振り、ナンパ男の肩をかすった。

「覚えてやがれ！？」

ナンパ男は逃げ出した。

「すいませんでした…。」

「あの…。」

ナンパされた女性が武蔵に声をかけようとしたが、

「やればできるじゃないか。偉いよ。あんた。」

千佳は武蔵を褒めた。

「でも俺…。」

「笑っちゃったけどさっきよりはマシになったね。」

「ははっ…。でも…千佳さんのおかげですよ！」

「あたいは何もしちゃいないよ。」

「チツ。女いるのかよ…。」

「何だい？あんだ。」

千佳は態度の悪い女を睨みつけ、女は無言で逃げ出した。

「千佳さん？」

「さて、まださっきの話の続きを聞いていなかったね。」

「はい…。」

千佳は武蔵の旅の理由^{わけ}を改めて聞いた。武蔵は両親によってヤクザに売り飛ばされた妹を探してこの阿見浜へとたどり着いた。そして…。

「そのヤクザの居場所はわかるのかい？」

「はい。町にある賭博場にいると聞きました。」

どうやら武蔵の妹は賭博場にいるらしい…。

「あんたは行くのかい？」

千佳の問いに武蔵は…。

「行きますよ！」

と答えた。

「本当にいいのかい？死ぬかもしれないぞ。」

千佳はもう一度武蔵に問う。相手はヤクザ。数十人、数百人以上かもしれない…。千佳自身にとっては敵ではないが、武蔵自身にとっては生死に係るからである…。武蔵は…。

「俺は行きます！たとえ妹が望んでいなかったとしても、一目だけでいいから妹に会って『兄はここまで旅をしてきた』って言いたいですから！」

武蔵の目に迷いはなかった。千佳は笑みを浮かべ、

「よし！あたいも行くよ！弱い奴らばかりでウンザリしてたからね。ただし、あんたがどうなってもあたいは手を貸す事はできないから覚悟しておくんだね。」

千佳の一言に武蔵は

「何だってやれるさ！明日のファンドシがあれば！」

千佳も女なのでファンドシという言葉に顔を赤くし、

「下品な事言っていないでさっさと準備しな!？」

おかしい…。いつも罪人を拷問するために罪人のフンドシなどを見
てきたはずの千佳がフンドシという言葉に顔を赤くしてしまうとは
…。

「千佳さん。行くのなら言ってくださいね。」

武蔵の言葉に千佳は我に還る。

(さあ行くよ! or もう少し待ちな!)

「さあ行くよ! ヤクザ者をごうも…いや…斬り捨ててやるよ!」

千佳は充分にやる気。

(さすが千佳さん…。凄い気迫…。)

武蔵は啞然としていた…。こうして、武蔵の妹を救出すべく千佳と
武蔵は町の賭博場へと向かった。

町の賭博場。そこにヤクザ者や金欲の塊とかが金や拉致した町娘
や遊女などを使ったりして遊んでいる。

「ぐへへへへ。」

ヤクザ者がニヤニヤと酒を飲んでいた時!? ガラン!

「なっ…何だ!？」

そこに戸を蹴り倒した千佳と武蔵が賭博場に侵入した。

「大量だねえ」

千佳はヤクザ者達を見渡し、喜んでいる。

「貴様ら何者だ!？」

「きゃあああ!？」

ヤクザ者達は立ち上がり、娘や遊女達は逃げ出した。

「通りがかりの剣士だよ!」

千佳は倒した戸に片足を乗せ、女王様気取りをする。

「千佳さん…。」

武蔵は千佳に半ば呆れたが、ヤクザ者の方へと顔を向き直し、

「お前達!恵をどうした?」

武蔵の妹の名は『恵』。武蔵はヤクザ者に問うが…。

「知らねえよ!」

もちろんシラを切られたが、もちろん女王様が黙っているはずもなく、

「死にたくないなら答えな！それとも、あたいと遊んでいくかい？」

千佳は殺意を込めた眼でヤクザ者達を睨みつけ、千佳は刀を抜く。
ヤクザ者達は千佳の眼に圧倒されながらも…。

「おっ…お前ら…。やっちまえ！」

ヤクザ者達は刀を抜き、

「行きますよ！千佳さん！」

さっきまで武蔵とは違う彼の気迫に千佳は少し圧倒されたが、

「あたいらも遊びに混ぜておくれよ。」

ヤクザ者達は走り出し、

「でえい！」

「たあ！」

千佳と武蔵は刀を振り、ヤクザ者2人を倒す。千佳と武蔵はゆったりと歩み寄り、

「終わりだよ！」

千佳は刀でヤクザ者達を次々と斬り倒し、

「おりゃあ！」

武蔵も刀でヤクザ者達を次々と斬り倒していく。

「後はあんただけだよ！」

ヤクザ者達は全滅。残る1人は…。

「俺に戦いを挑むとはいい度胸だな。」

現れたのは肩越しくらいの髪に黒と黄色の布のような服を着たヒゲの男だった…。

「恵はどこだ？」

武蔵は男に問う。

「さあな…。でも俺より前の奴が幕府に売ったと言っていたな。」

「何だつて！？」

千佳と武蔵は驚く…。まさか千佳の所属の幕府に恵が売り飛ばされていたとは…。

「武蔵。あんたは代官所にお行き！」

千佳は男に顔を向けたまま武蔵に代官所に行くように命令する。

「ですが…千佳さん…。」

「この落ちぶれ野郎はあたいが相手をする。だから先に行け！」

千佳にもわかっていた。ヤクザ者の大将らしき男が強いということに…。

「はい！千佳さん…。ご無事で！」

「代官所に行ってもあたいが来るまでおとなしくしてな。」

「はい！」

武蔵は賭博場を出て、代官所へと向かった。

「さて、これであたいとあんなだけになった。」

千佳はヤクザ者の死体から刀を奪い、

「あたいは強い男は好きなんだ。楽しませておくれよ。」

千佳は自分の刀を右手、奪った刀を左手に持ち、二刀流の構えをとった。

「女！名は？」

男は刀を構えながら千佳に問う。

「こういうのは殿方から名乗るものじゃないかい？随分と不躰だね。」

「俺は堂島！堂島軍司だ！」

男は堂島軍司と名乗った。

「あたいは千佳。」

千佳も名乗った。

千佳と堂島は構えたまま睨み合う…。2人ともお互いの強さがわかってる。

（いくら二刀流でも片方はあたいの刀じゃないから少しやりにくいね…。）

（この女…。ただ者じゃねえ…。）

2人とも額から汗を流す…。

「うおおおお！」

先に動いたのは堂島。

「はあ！」

千佳は刀を一振りしたが、

「しまった!？」

堂島は腰を低くし、千佳の一振りをかわし、刀を突き出したまま闘牛のように足元を狙った。

「くっ!？」

千佳はバックステップでなんとかかわす。

「やるな！女。」

「あたいはただの女じゃないよ！これは楽しめそうだねえ。（今は少し危なかったな…。）」

千佳は構え直し、防御姿勢をとる。

「闘牛には闘牛士だね。」

「うるせえ！」

堂島は飛びかかるように千佳を斬りつけようとしたが、

「ぐわあ！？」

「安心しな！峰打ちだよ。」

千佳は得意の二刀流の当て身の峰打ちで堂島を吹っ飛ばし、

「じつくりと遊んであげるよ！」

千佳は堂島の首に刀を突き出したかと思った瞬間、刀の柄で堂島を転ばせ、堂島の頭を踏みつけた。

「さっきまでの威勢はどこへ行ったんだい？」

「この女！」
あま

堂島は千佳に踏みつけられても立ち上がろうとしていた時！？

「勝負ありじゃ！」

「親方…。」

千佳が振り返ると、白髪に上半身裸でメガネをかけた老人が現れた。

「堂島よ。お前さんの負けじゃ。」

「俺はまだ負けてねえ！？」

「何者だい？」

千佳は堂島を踏みつけながら老人に問う。

「ワシは町の鍛冶屋じゃ。堂島はワシのかつての弟子じゃった。」

「かつて？」

「ああ。堂島には才能があつたんじゃ…。」

「俺に才能なんか…。」

「なんかわかる気がするよ…。」

千佳はまだ堂島を踏みつけているままだが、寂しそうな表情に変わった。

「あたい…初めて人を斬った時は怖かった…。いつも姉に置いていかれてる気がしてた…。でも亡くなったお母様が言ってた…。実は姉じゃなくてあたいの方に才能があるって…。」

「親方…。俺は…。」

堂島は涙を流していた。

「堂島よ。鍛冶屋を継いでくれないか？」

「はい…。」

親方も涙を流し、師弟愛を見た千佳は…。

（師匠か…。あたいの師匠はお父様だった…。お父様はいつも厳しくて…あたいは父親というより厳しい剣術の先生としか思えてならなかった…。いつもお姉様にばかり愛情を注いでいた…。あたいは悔しくてお姉様や百合よりも何倍も努力して今の強さを得たんだっ
たな…。）

「おい！さっさと足を退けろ！この女！^{アマ}」

堂島の声で千佳は我に還る。まだ堂島を踏みつけていた…。

「何だいその眼は！？」

堂島の態度の悪さに千佳は怒ってしまいが…。

「これ！堂島！おなごに向かって何じゃ！？その態度は！」

親方は堂島を一喝し、

「すまんのう…。その馬鹿弟子はワシが厳しく叱るからもう勘弁してもらえないだろうか？」

怒っていた千佳だったが、親方の顔に免じて、

「あたいの気はこれで済んだよ。あとはあんたが厳しくお仕置きしてやりな。」

千佳はやつと堂島の頭から足を退け、

「今度あたいの刀を研いておくれ。」

千佳は奪った方の刀を畳に差し込み、自分の刀を収め、親方と堂島に笑みを浮かべて賭博場から出た。

「さてと…。さつさと武蔵の妹を助けないとね。」

千佳は代官所へと向かって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8497y/>

侍道4 もしも鬼怒川千佳が主人公だったら

2011年11月29日17時47分発行